

美作の狛犬（2）真庭市

田淵千香子

はじめに

前号では、津山市内 67 対の狛犬の調査を行い、大阪・出雲・尾道・岡崎の 4 タイプに大別されることを報告した。そして、その大半を占める岡崎型狛犬にスポットをあて、そのルーツに迫った^(註1)。今回は、真庭市内の狛犬を取り上げることにする。調査した 39 対の内、23 対は出雲型の影響を受けた狛犬であることが分かった。小稿では、真庭市内で大半を占める出雲型狛犬が、どのようにして真庭地域に流通したのかについて検討する。

真庭市の狛犬の種類

真庭市内で見られる狛犬には、大阪の狛犬・出雲型狛犬・尾道型狛犬・岡崎型狛犬・備前焼狛犬・銅製の狛犬の 6 種類がある。前号で報告した津山市の状況と

ほぼ同様である。他に、台座の銘などから鳥取、兵庫、津山などからも入ってきていることが分かった。真庭市の狛犬の中には、真庭市勝山の玉雲宮出雲大権現社の文政 6 年（1823）を始め、真庭市蒜山中和の山王大権現社の天保 11 年（1840）など江戸時代の古い出雲型が多数、存在している（写真 1・11）。また、真庭市蒜山下和にある中和神社の狛犬は、文政 8 年（1825）で形式は大阪の狛犬である（写真 6）。このように真庭市では、出雲型と大阪の狛犬が時期的に混在していることも判明した。ちなみに、津山市では、江戸時代に属するものはその殆どが大阪の狛犬で、出雲型は宮脇町にある徳守神社の明治 40 年（1907）が初出である。岡崎型は、真庭市中原の八幡神社の昭和 12 年（1937）などが見られ、昭和になってから入ってきたことが分かる。津山市とほぼ同じ状況である（写真 4）。尾道



写真1 玉雲宮出雲大権現
（真庭市勝山）
文政6年（1823）
出雲型



写真2 垂水神社
（真庭市垂水）
文久3年（1863）
出雲型



写真3 熊野神社
（真庭市上河内）
昭和5年（1930）
出雲型



写真4 八幡神社
（真庭市中原）
昭和12年（1937）
岡崎型



写真5 天津神社
（真庭市高尾）
昭和15年（1940）
尾道型



写真6 中和神社
（真庭市蒜山下和）
文政8年（1825）
大阪の狛犬



写真7 中和神社
（真庭市蒜山下和）
文化7年（1810）
犬像が狐像



写真8 茅部神社
（真庭市蒜山茅部）
明治31年（1891）
銅製



写真 9 高田神社
(真庭市勝山)
昭和 6 年 (1931)
備前焼 (写真提供: 森俊弘)



写真 10 福田神社
(真庭市蒜山中福田)
文久元年 (1861)
座形



写真 11 山王大権現社
(真庭市蒜山中和)
天保 11 年 (1840)
構形

型には、真庭市高尾の天津神社の昭和 15 年 (1940) の狛犬があり、美作地域では珍しい玉乗り形である (写真 5)。鳥取の石工銘が見られる狛犬は、真庭市と隣の新庄村のものを合わせると 4 対ある。その内、真庭市蒜山下和の中和神社の狐像 (犬像か?) には、「伯州久米郡田内村勘兵衛 同湯間村傳右衛門」とあり、鳥取の石工の名が見える。年銘は、文化 7 年 (1810) でこの地域では最も古いものである (写真 7)。他の 3 対に関しては、石材は区々であるが出雲型である。銅製及び備前焼狛犬に関しては、各々 1 対ずつを確認している。銅製の狛犬は、真庭市蒜山茅部の茅部神社大鳥居前にあり、明治 31 年 (1898) に「大阪市高津住 鋳物師 今村久兵衛」によって造られたことがわかる (写真 8)。また、銅製の狛犬は有名な彫刻家が造ることもあり、神戸市の湊川神社のものは平櫛田中の作品である。しかし、こうした銅製の狛犬の中には戦争中に銅の供出の為、鋳造所に収容されたものもあったらしい (註 2)。また、真庭市勝山の高田神社に所在する狛犬には備前焼の狛犬があり、昭和 6 年 (1931) に造られたものである (写真 9)。備前焼の狛犬は、備前焼宮獅子とも呼ばれる大型陶製の岡山県地域独特の焼き物である。石製に比べると軽量で運びやすいことから、注文が増えて北海道地域まで伝播した。年銘初出のものは、備前市木谷の天神社の貞享 3 年 (1686) のもので、閑谷学校の備前焼瓦を製作した閑谷窯で焼成されたものである (註 3)。

出雲型狛犬の特徴

ここでは、真庭市に多く所在する出雲型狛犬の成り立ちや特徴について触れる。出雲型狛犬は、宍道湖沿

いで採掘される凝灰質砂岩の「来待石」で造られる。来待石は、柔らかい材質で繊細な細工がしやすいことから、狛犬や灯籠などに多く用いられた。しかし、柔らかく細工がしやすい反面、風化しやすいという欠点もある。出雲型狛犬の形式には「座形」と「構形」の 2 種類がある。背筋を伸ばし蹲踞の姿勢をとるものが「座形」 (写真 10)、今にも飛びかかっていきそうな姿勢のものが「構形」である (写真 11)。「座形」の特徴としては、長い垂れ耳をもつこと。尻尾は蠟燭や筆先のような形をしていることなどがあげられる。「構形」の特徴は、腰を上げた前傾の身構え姿勢をとり、転倒や足の破損を防ぐために板状の箱座がつくことなどである。姿形以外の顔立ちは、座形と同じである。台座には牡丹の花が彫られているものが多い (写真 12)。台座は、他の形式と同じ四角い形のもの、他の形式には見られない丸い円座のもの 2 種類がある (註 4)。

出雲型狛犬は、古来から出雲に棲息する地犬で、国の天然記念物に指定されている「山陰柴犬」がモデルとされている。初期の出雲型狛犬は、頭が小さく犬歯



写真 12 福田神社
(真庭市蒜山中福田)
牡丹の花が彫られた台座



写真 13 金刀比羅神社
(香川県琴平町)
天明元年(1781)
(写真提供: 田淵道夫氏)



写真 14 金毘羅宮
(島根県玉湯町)
天明2年(1782)
(写真:『狛犬見聞録』より)



写真 15 八重垣神社
(島根県松江市)
不明



写真 16 石宮神社
(島根県穴道町)
明治~大正期

が丸いのが特徴的で、足などの表現がリアルで躍動感があり、写実的で高い技術力を感じさせる。これは、山陰柴犬を身近に見ながら作ったためではないかと考えられている^(註5)。ちなみに、山陰柴犬は、韓国の犬と遺伝面での類似性が極めて高いことが立証されている。

島根県の出雲型狛犬

島根県内の狛犬は、岡崎型などが多少見られるものの、その殆どが地元の来待石で造られた出雲型狛犬である(写真16~18)。特に、出雲型狛犬の発祥の地である松江市では、橋北地区だけでも230例近くにもものぼる^(註6)。こうした状況から、松江市を中心とした来待石製品の特殊な状況を窺い知ることができる。この背景には、松江藩が来待石を「御止(おとめ)石(いし)」として定め、藩外への持ち出しを堅く禁じていたことが挙げられる。さらに、石工職人も藩の許可を必要としていて、その職人は松江城下に住まねばならないという厳重なものだった。このようにして培われた技術で造られる来待石製品は、一種のブランド的価値を高めたものと思われる。その生産拠点である松江には、外部からの狛犬が入ってきにくいという背景があったのではないかと推測される。出雲型で最古の狛犬は、天明元年(1781)の香川県琴平町の金刀比羅宮遥拝所前のものである(写真13)。また、古代から瑇瑁の産地として知られている花仙山に連なる山の頂上に祀られている玉湯町玉造の金毘羅宮には、天明2年(1782)の銘がある山陰最古の狛犬がある(写真14)。姿形は、出雲型狛犬の祖形とされる松江市の八重垣神社のものと同形である(写真15)。



写真 17 山代神社
(島根県松江市)
文政2年(1819)



写真 18 松江神社
(島根県松江市)
江戸~明治期



写真 19 須衛都久神社
(島根県松江市)
昭和7年(1932)



写真 20 茅部神社
(真庭市蒜山西茅部)
年代不明



写真 21 須衛都久神社
(島根県松江市)
昭和7年(1932)
渡辺卯助銘



写真 22 茅部神社
(真庭市蒜山西茅部)
年代不明



写真 23 吉田神社
(津山市神戸)
昭和 12 年(1937)



写真 24 田神社
(津山市上田邑)
昭和 8 年(1933)



写真 25 佐良神社
(津山市一方)
昭和 9 年(1934)

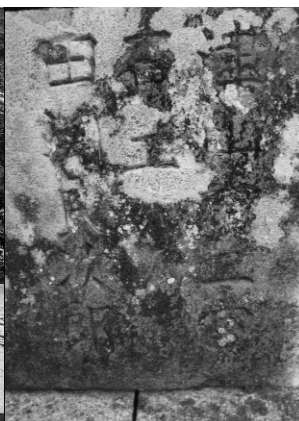


写真 27 田神社
(津山市上田邑)
昭和 8 年(1933)
田淵良次(治)郎銘



写真 26 吉田神社
(津山市神戸)
昭和 12 年(1937)
田淵良次(治)郎銘

島根の狛犬と石材の流通

日本各地に広まった出雲型狛犬の中で、島根から直接、美作地域にもたらされたと分かる狛犬もある。真庭市蒜山西茅部の茅部神社拝殿前の狐像の台座には、「松江石工 渡辺卯助」の銘がある(写真 20・22)。この渡辺卯助は、明治期以降に銘の入った狛犬を全国各地へと販売していた「渡辺卯助商店」の店主の名である。一般的には、渡辺卯助が制作した狛犬であると思われるが、実際には「渡辺卯助商店」に所属していた石工によって彫られたものである(写真 19・21)^(註)

7)。

また、津山市神戸の吉田神社と津山市上田邑の田神社の狛犬(写真 23・24)の台座には、「田淵良次(治)郎」と刻まれている(写真 26・27)。田淵良次郎とは、現在津山市内で石材屋を営む田淵石材の会長の祖父で、田淵石材の初代にあたる人である。昭和の初め頃まで、島根の方へ直接石を買い付けに行っていたこともあるらしい。さらに、銘は刻まれていないが、津山市一方にある佐良神社の狛犬も田淵石材で製作されたらしいとのことである(写真 25)。

美作地域に見られる出雲型狛犬の影響

さて、美作地域で見られる出雲型狛犬は、直接島根から入ってきたもののばかりではない。中には、出雲型を模して地元の石材などを用いて造られるものも出てきた。その一つが大阪製出雲型狛犬である。これは、江戸時代に日本各地に伝わっていた出雲型狛犬を模して大阪の石工が地元の石材を用いて造ったものである。



写真 28 八幡神社
(津山市阿波)
弘化 2 年(1845)
泉州石工 里山源助



写真 29 金刀比羅神社
(津山市中原)
年代不明
泉州石工 里山源助



写真 30 高野神社
(津山市二宮)
文久 2 年(1862)



写真 31 高倉神社
(津山市下高倉西)
大正 3 年(1914)



写真 32 倉見神社
(津山市倉見)
安政6年(1859)



写真 33 日吉神社
(勝央町植月)
年代不明



写真 34 倭文神社
(鳥取県湯梨浜町)
文政2年(1819)石工・磯右衛門
(写真提供：岩本えり子)

津山市内でもその作例が見られ、津山市阿波の八幡神社や津山市中原の金刀比羅神社の狛犬がこれに相当する(写真28・29)。この狛犬の台座には「泉州石工里山源助」とあり、大阪の石工によって造られたことがわかる。しかしその形式を見ると出雲型であり、この狛犬が大阪製出雲型狛犬に当たることがわかる。さらに、刻銘がなくどこで造られたか不明であるが、姿形から出雲型狛犬であると考えられるものが美作地域に多数みられる。石材は、凝灰岩・花崗岩・砂岩と様々であるが、形はどれも出雲型を原型としている(写真30～33)。このように、美作地域では出雲型の影響を受けた狛犬を複数確認することができる。

出雲型狛犬と牛馬信仰

島根で作られる来待石製の出雲型狛犬の流通は、山陰地域から遠く北海道まで及び、美作地域でも多数確認することができた。島根と美作地域とを結ぶ大きな要因としては、大山を中心とした「牛馬信仰」があげられる。この信仰は、牛馬に感謝することでできたもので、地藏権現を牛馬の守護神として人々の尊崇を集めるようになり、牛馬を伴った大山参詣をいっそう盛んにしていった。牛馬市は、こうした参詣者間の牛馬の売買を起源とするものであり、出雲や伯耆につながる出雲街道や大山道などの街道筋には、馬頭観音や牛馬に係わる石像物が多く祀られている。牛馬市は、街道沿いの宿場町や牛馬の神様を祀った社で行われ、各種の石造物も奉納されている(註8)。美作地域では特に真庭市久世の牛馬市が有名で、公認としては明治10年(1877)の記録に「創設はわからないが、慶長9年(1604)に森忠政が運上銀64匁(税金)で牛馬市の開

設を許可した」と記している。久世牛馬市は、大山道筋としての影響を受け、出雲や伯耆、美作、備中、備前、京阪神などの中継地として多くの諸物産が取引された(註9)。また、文政2年(1819)、衣川長秋は『耶都礼蓑の日記』で「鳥居の前にて牛馬市あり、備前・備中・備後・伯耆・出雲・美作・石見・但馬・播磨・隠岐・因幡・安芸・讃岐の13国より集い来て、もの言いかけと牛馬のいななく声するばかりなり」と、牛馬市の賑わいぶりを伝えている(註10)。

このように、これらの街道が周辺地域との経済的脈路として大きな位置を占めていたことがわかる。そして、諸産物の取引の中には石造物の取引も含まれていたと思われ、真庭市に多く見られる出雲型狛犬は、こうしてもたらされたのではないかと考えられる。また、美作地域だけでなく、伯耆や讃岐地域などでも出雲型狛犬を見ることができ、交易圏の広さを窺うことができる(写真34)。

美作地域の石造物

これまでに、島根で採掘される来待石で造られた狛犬について言及してきたが、ここでは、美作地域で採れる石材を用いて造られる石造物について触れておく。



写真 35 石山寺・石切り場跡(津山市大谷)



写真 36 津山城・石垣(津山市山下) 写真 37 石山寺・参道(津山市大谷)



写真 38 灯籠
八坂神社(津山市八坂)



写真 39 鳥居
押淵神社(津山市押淵)

津山市大谷の石山寺周辺では、津山城築城に際して石を切り出した跡が今も残り、往時を偲ばせる^(註11)。さらに、採石した跡は残っていないが金屋山でも凝灰岩を切り出し、石垣に用いられていたようである(写真 36)。このような、津山城の石垣と同質と考えられる凝灰岩の石造物には、狛犬や灯籠、鳥居、石碑、石段などがあり、市内各所に点在している(写真 38・39)。石山寺に続く参道の長い階段は、すべてこの石材で造られ整然としている(写真 37)。狛犬は、形式が一定でないためか、どこともなくユーモラスで面白く、今にもしゃべり出しそうなものもある(写真 40～42)。

最後に、前回の報告で述べた平成 17 年(2005)に盗難被害にあった津山市上横野の高田神社の備前焼狛犬について、その後、ありがたいことに詳細な姿が分かる写真を提供していただく機会を得た。発見の足掛かりとなることを祈り掲載させていただく(写真 43)。

まとめ

以上、真庭市の狛犬を中心に検討を行ってきた。その結果、市内の狛犬の半数以上が出雲型狛犬であることが判明した。その中で、真庭市最古の出雲型は、勝山にある玉雲宮出雲大権現社の文政 6 年(1823)のものであることが分かった。また、津山市最古の出雲型は、津山市宮脇町の徳守神社の明治 40 年(1907)であることも分かった。このことから、同じ美作地域でも真庭市と津山市で出雲型の流入の時期に大きな違いがあることがわかった。この時期差は大山を中心とする牛馬信仰・牛馬市が大きく関わっていたものと考えられる。特に、真庭市久世の牛馬市は、大山道筋に立地することから出雲、伯耆、美作、備中、備前、京阪神など多くの地域との中継地の役割を果たしていたため、多くの文物の取引がなされた。この流通の一翼を担ったのが出雲型狛犬でもあった。松江の石工である渡辺卯助銘入りの狛犬が真庭市に入っていること、



写真 40 高野神社
(津山市高野本郷)
天保 15 年(1844)



写真 41 高田神社
(津山市上横野)
明治 33 年(1900)



写真 42 美作総社宮
(津山市総社)
嘉永 6 年(1854)



写真 43 高田神社（津山市上横野）
（写真提供：相原武弘氏）

さらに、直接島根県の来待石を買い付け、津山市内で出雲型狛犬を造っていることなどからも、島根県と美作地域との流通の一端を窺い知ることができる。

このように、松江で発祥した出雲型狛犬は江戸から昭和にかけて日本各地に広がり、美作地域にも多大な影響を与えていることが分かった。

小稿を記すにあたって、倉敷埋蔵文化財センターの藤原好二氏、来待ストーンミュージアムの永井泰氏、田渕石材の田渕清巳氏には種々ご教示いただいた。また、相原武弘氏、森俊弘氏、岩本えり子氏、田渕道夫氏には写真を提供していただいた。さらに行田裕美氏、岩本えり子氏、竹内梓氏、田渕智也氏には現地調査でお世話になった。末筆ながら記して御礼を申し上げます。

（註1）田渕千香子『年報 津山弥生の里 第17号』津山市教育委員会 2010年

（註2）上杉千郷『日本全国 獅子・狛犬ものがたり』戒光祥出版 2008年

（註3）備前市教育委員会『備前焼記念銘土型調査報告書』1999年

（註4）倉敷埋蔵文化財センターの藤原好二氏の御教示による。

（註5）島根県来待ストーンミュージアムの永井泰氏の御教示による。

（註6）廣江正幸・永井泰『出雲・石見 狛犬見聞録』2010年

（註7）永井泰『来待ストーン研究9』2008年

（註8）島根県来待ストーンミュージアムの永井泰氏の御教示による。

（註9）小谷善守『出雲街道』出雲街道刊行会 1999年

（註10）岡山県教育委員会『大山道』1994年

（註11）津山市教育委員会『津山市の文化財』2008年

参考文献

・相原武弘『備前焼宮獅子～全国の備前焼宮獅子を訪ねて～』

日本文教出版株式会社 2010年

・真庭市教育委員会『真庭市の文化財』2010年

掲載 番号	神社名	所在地	寄進年	石工銘	体長 (cm)	姿勢	材質	型	保存状態
1	玉雲宮(出雲大権現)	真庭市勝山	文政 6 年 (1823)	不明	120cm	座	来待石	出雲型	良い
2	垂水神社	真庭市垂水	文久 3 年 (1863)	不明	63cm	構	来待石	出雲型	良い
3	熊野神社	真庭市上河内	昭和 5 年 (1930)	不明	76cm	横	来待石	出雲型	良い
4	八幡神社①	真庭市中原	昭和 12 年 (1937)	〇〇国西宮 石匠 岡田石材店	74cm	座	花崗岩	岡崎型	良い
5	天津神社	真庭市高尾	昭和 15 年 (1940)	不明	85cm	玉乗り	花崗岩	尾道型	良い
6	中和神社	真庭市蒜山下和	文政 8 年 (1825)	不明	86cm	座	花崗岩	大阪の狛犬	良い
7	中和神社	真庭市蒜山下和	文化 7 年 (1810)	伯州久米郡 田内村勘兵衛 同湯岡村 偲右衛門	65cm	座	砂岩	犬か狐像	一部欠損している。
8	茅部神社	真庭市蒜山西茅部	明治 31 年 (1898)	大阪市高津住 鋳物師 今村久兵衛	150cm	座	銅製	狛犬	良い
9	高田神社	真庭市勝山	昭和 6 年 (1931)	不明	105cm	座	備前焼	狛犬	良い
10	福田神社	真庭市蒜山中福田	文久元年 (1861)	不明	111cm	座	来待石	出雲型	良い
11	山王大権現社	真庭市蒜山中和	天保 11 年 (1840)	不明	57cm	構	来待石	出雲型	心配
13	金刀比羅神社	香川県琴平町	天明元年 (1781)	不明	不明	座	来待石	出雲型	良い
14	金毘羅宮	島根県玉湯町	天明 2 年 (1782)	不明	不明	座	来待石	出雲型	心配
15	八重垣神社	島根県松江市	不明	不明	100cm	座	来待石	出雲型	一部欠損している。
16	石宮神社	島根県宍道町	明治～大正	不明	80cm	構	来待石	出雲型	良い
17	山代神社	島根県松江市	文政 2 年 (1819)	寺町 林蔵	93cm	座	来待石	出雲型	良い
18	松江神社	島根県松江市	江戸期～ 明治期	不明	およそ 90cm	構	来待石	出雲型	心配
19	須衛都久神社	島根県松江市	昭和 7 年 (1932)	松江市和暴見 渡辺卯助	125cm	座	来待石	出雲型	良い
20	茅部神社	真庭市蒜山西茅部	不明	松江石工 渡辺卯助	91cm	座	来待石	狐像	一部欠損している。
23	吉田神社	津山市神戸	昭和 12 年 (1938)	津山市二宮 工作 田淵良治郎	78cm	座	来待石	出雲型	良い
24	田神社	津山市下田邑	昭和 8 年 (1934)	津山市二宮 石工 田淵良次郎	77cm	座	来待石	出雲型	良い
25	佐良神社	津山市一方	昭和 9 年 (1934)	津山市二宮 石工 田淵良次郎	89cm	座	来待石	出雲型	心配
28	八幡神社	津山市阿波	弘化 2 年 (1845)	石工泉州住人 貝掛村 里山源助	72cm	座	花崗岩	大阪製 出雲型狛犬	良い
29	金刀比羅神社	津山市中原	江戸末期	石工泉州住人 貝掛村 里山源助	60cm	座	花崗岩	大阪製 出雲型狛犬	良い
30	高野神社	津山市二宮	文久 2 年 (1862)	不明	113cm	構	花崗岩	出雲型	良い
31	高倉神社	津山市高倉西	大正 3 年 (1914)	不明	98cm	座	花崗岩	出雲型	良い
32	倉見神社	津山市倉見	安政 6 年 (1859)	不明	68cm	座	花崗岩	出雲型	良い
33	日吉神社	勝央町植月	不明	不明	84cm	座	花崗岩	出雲型	良い
34	倭文神社	鳥取県湯梨浜	文政 2 年 (1819)	磯右衛門	不明	構	来待石	出雲型	良い
40	高野神社	津山市高野本郷	天保 15 年 (1844)	石工 橘屋町 安田口斎吉	60cm	座	凝灰岩	出雲形式	良い
41	高田神社	津山市上横野	明治 33 年 (1900)	不明	74cm	構	凝灰岩	出雲形式	良い
42	美作総社宮	津山市総社	嘉永 6 年 (1854)	不明	81cm	座	凝灰岩	出雲形式	良い
43	高田神社	津山市上横野	昭和 15 年 (1940)	木村貢一友敬	85cm	座	備前焼	備前焼狛犬	平成 17 年に盗難被害にあう。

本稿掲載狛犬一覧表